

著名人 クリスチャンの 家庭

最終回

今まで連載してきたこのシリーズも、いよいよ最終回となった。以前から、「最終回は私たち夫婦の結婚生活を取り上げよう」と思っていた。私たちは著名でもなんでもないが、少しでも参考になれば幸いである。

私は一九四九年、新潟県の新発田市に生まれ、家内の明美は一九五四年に新潟県の高田市（現上越市）に生まれた。共に高校生の時にキリストを信じ、洗礼を受けている。その2人が出会ったのは、柏崎の聖ヶ丘^{ひじりがおか}バイブルキャンプ場であった。互いに何かひかれるものを感じ、文通によって交際するようになった。そして次第に結婚の可能性を考えるようになった。

しかし、家内にとって、私は将来牧師になろうとしていた神学生である。彼女にはまだ牧師夫人として献身者としての召しがかかったので、随分悩んだらしい。

プロポーズは相模湖畔であった。私は、「自分は生涯伝道者として歩む。その私についてきてほしい」と語った。それに対する答えは「わかりません」であった。しかし、私はめげずにその場で迫り続けた。私としては、彼女が「イエス」と言うまで帰さないつもりであった。

ついに「イエス」と言った時、彼女は涙を流した。私は、プロポーズされた嬉し涙と想っていたが、あとで聞いたら、心ならずも「イエス」を言ってしまった悔し涙であったらしい。

かくて婚約者になった彼女に、私はいろいろと要求をした。「将来牧師夫人となる者は、こういう本を読まねばならぬ」と、月1冊課題図書を与え、レポートを出してもらい、添削して返していた。いま思うと酷なことをしていたものである。

結婚式は、一九七五年10月10日であった。振り返ると、最初の数年は決まらずにうまくいっていったと言えない。私があまりにも忙しく仕事中心の生活をして、家庭を顧みなかったからである。ある時、家内が私に物をぶつけて、「あなたなんか、ちっとも私のことを分かっていない」と叫んだことがあった。いま思うと、よほど家事や育児のストレスがたまっていたのだろうが、その時はそれほど深刻に受けとめなかった。あのままいったら、悲惨な家庭になっていたと思われる。

しかし、神さまはこんな私たちを憐れんでくださり、結婚4年目に渡米留学の2年間で与えてくださった。そして、神学校で家庭に関するクラスを取った。神さまは、とても家庭を大切にされるアメリカ人夫婦を親友としてそばにおいてくださった。彼らから学んだものは実に大きかった。

そのほかにも家庭について教えられた。まず、自分の最も身近な者を愛することから始めること、自分の家庭を治めることなくして組織を治めること

文＝中村 敏

私たち自身の結婚を振り返って

はできない、ということなどを学んでいた。

私は、自分の優先順位が間違っていたことを家内に心から謝った。それから私たちの家庭は変わっていった。いろいろなことを家族で共に経験し、楽しむようになった。これは大きな変化であった。

渡米中に次女が生まれた。このことも私たち夫婦にとって貴重な体験であった。ラマーズ法で生まれた子どもである。これは、夫が妻の出産に立ち会い、協力するというものであった。長女の時は、私はただ病院にいただけで、実感としては「家内が産んだ」というものであった。

しかし、次女の場合、私は終始家内のそばに付き添い、陣痛の時は手を握りしめて励まし、出産に立ち会った。まさに「2人で産んだ」という実感があった。

日本に戻ってきてからもいろいろあったが、前とは違って話し合い、祈り合って乗り越えることができるようになった。

結婚して15周年の時に、私は家内にしじみと告白した。

「私はあなたと結婚できたことを心から感謝している。自分の人生の中で、学位を取ったり、本を出版できたりしたことは嬉しいことだった。でもそれ以上に、あなたと会えて幸いな結婚生活を送れていることを心から感謝している。私のような者についてきてくれて、ありがとう」

少し恥ずかしかったが、そのように感謝した。

私が55歳を過ぎたある時、病気に襲われ、1ヶ月寝たきりで何もできない時期があった。とてもつらく、もう自分はこのまま廃人になるのだろうか、それならもうイエスさまのもとに行きたほうがいい、と思つたほどだった。

そのような時、家内が私のかたわらで、「生きていてくれて、ありがとう」と言ってくれた。その時、私はハッとさせられた。私が、何ができなくてもただ生きていくだけで喜んでくれる人がいる。それなら私はどんなことがあっても、生きていかなければならないと。

辛い癒されたが、夫婦の絆を強める貴重な経験であった。

長男が家庭を巣立つ時、「僕は、お父さんとお母さんがけんかをすることを一度も見ることがない」と言ってくれた。私たちがも意見の違いは出てくるし、やり合うこともあったかもしれない。しかし、それ以上に支え合い励まし合っている印象が強かったのだろう。私たちは、家庭はお互い受け入れ合い、赦し合う場所と思つているからである。

これからもまだ夫婦の生活は続くが、主を見上げて歩んでいきたい。

編集部より

*4年間連載をしていた
だいた中村敏先生、背後で
支えてくださった明美夫
人に、スタッフ一同、心よ
り感謝を申し上げます。本
当にありがとうございます。



中村 敏(さとし)
1949年生まれ。新潟県出身。
聖書神学舎、トリニティー神学校卒。
日本伝道福音教団 新潟聖書教会牧師。
新潟聖書学院院長